

野守は見ずや その後

―天智と天武と額田王―

吉田 賢右

だいぶ前の私の「顧問室の窓」に、万葉集の額田王^{ぬかたのおおきみ}と大海人皇子^{おほあまのおうじ}の相聞歌のやりとり、古代日本の双系的社会のなごりを見る記事を書いた(2021年7月1日)。その後、この歌がいかなる状況で詠まれたのか、考えることがあり、以下、前稿の続編としたい。

額田王は大海人皇子(天智の弟、後の天武天皇)の妻で二人の間には子供(十市皇女^{といちのみこ}、後に天智天皇の息子の天友皇子の妻となる)もできていた。しかし、今は天智天皇の妻となっていた(注1)。

668年、琵琶湖西岸の近江大津宮に遷都して即位したばかりの天智天皇が5月5日、琵琶湖東岸の蒲生野で縦獵^{しやうりやう}(葉草や鹿の袋角(葉になる)などを採集する野遊び)を催した。宮廷の皇族群臣がそろって参加したという。

その折の、額田王と大海人皇子の歌のやり取り。

あかねさす紫野行き 標野^{しめの}行き

野守は見ずや君が袖振る

紫草^{むらさき}のおえる妹を憎くあらば

人妻ゆえに我恋ひめやも

これは、かつては自分の妻であったとはいえ、今は最高権力者の妻となっている女性からのこっその呼びかけに、男が嬉しく熱く応える恋のかけあいの歌である。

女性始動でこんな歌が交換できたのも、女性が社会的にも個性においても独立した人格で活動できた古代の伝統が男性優位に推移しつつも底流としてまだ生きていたからだろう、と私は述べた。

とは言え、この歌については、そのあまりの大胆さに、後世の文人・評論家はこの歌が詠まれた状況について、

説明に困ったようで、あえて触れないか、あるいは、倫理と政治が未分化の時代のことだとか、凝った解釈をする。その中で、詩人・評論家の大岡信さんの解釈は明快であり、通説のようになっていいるらしい。大岡さんは、この縦獵の夜は盛んな宴が催されただろう、と考える。そして、次のように述べる(注2)。

これは衆人環視の場で唱和された恋の歌でした。立ち入って考えてみれば、そのような心浮き立つ宴の場だったからこそ、歌の主題が秘密めいた恋の歌であることが重要だったのです。人々はそのの歌を聞くことをとりわけ好むという点では、古代も現代も変わりません。：額田王と大海人皇子の場合は、この条件が最高に備わっていました。子までなした元愛人同士でありながら、今、女は男の兄の愛人になっているのです。そのような二人が、とうに若々しい恋情の時代が過ぎ去ったはずの年齢になつても、なおこんなきわどい恋歌を交換しているということは、並み居る人々にとつてなかなか刺激的なことだったでしょう。それが大っぴらにおこなわれたことによつて宴席の陽気な空気はいやがうえにも盛り上がったに違いありません。人々は拍手喝采したでしょう。

要するに、この歌は野遊びの後の宴会で余興として披露されたもので、やんやの喝さいを受けただろう、というのである。

そうだろうか。

大岡信さんは、そのとき、天智天皇はどんな反応をしたのか、考えていないようだ。天智は拍手喝采しただろうか。なみいる貴族王族たちは、天智のいる前で、この歌を聞いて笑いざわめくことができたのだろうか。だいいち、額田王と大海人皇子はこの歌を、天智と群臣の前で唱和しただろうか。

私は、この歌は二人の間の私的な贈答歌で、少なくとも、天智存命中は公開されなかった、と考える。公開されたのは、天武の天下になってから、あるいは、世代を経て天智天武の相克が昔の歴史的記憶になった80年後、(天武系の)聖武天皇の時代に万葉集に回収されたのかもしれない。

だいたい、忍ぶ恋の歌の応答は他にもたくさんあるが、当然、それは即時的に公開されたわけではなく、歌集に採録されて周囲の眼に触れるのは障りのなくなつた後だろう。ましてや、以下に述べるように、当時の天智と大海人皇子の緊張した関係を考えれば、天智と群臣の前で唱和するなど、とてもありえない。

当時、皇族の間では、政略的な近親の婚姻が多かつたが、天智も女性を政略的にあるいは欲望にしたがつて扱つた。

天智は、自分の妻である 鏡 かがみのおうきみ 王女（額田王の姉？）を、忠臣の中臣鎌足に与えている。（『褒美』）

自分が滅ぼした 古人 ふるひと 大兄皇子の娘である倭姫王を皇后としている。（魅力？）

自分の娘4人（一）を次々と大海人に妻として与えている。（額田王との交換？）

額田王は、もともと大海人の妻だったが、天智は才媛の彼女を欲して、自分の妻としてしまった。この事件は朝廷の人口に上つたらしく、天智に次の三山歌がある。

香久山は 畝傍 うねび を愛 お せしと耳梨と 相争 あひこ いき

神代 うつせみ より かくなるらし 古 いにしえ も 然 しか なれこそ

現身 うつせみ も 妻を争うらしき

古代伝承を引きながら直截で悪びれず、だからどうした、という居直りの気配もある歌である。

これに対して、額田王と大海人のデユエットは、妻争いの本当の勝者は私たちですよ、とこつそりと微笑みを交わしながら確認する（注3）。女の方からの媚態を含んだ呼びかけに、男の方はさらに大胆に、人妻だろうとかまうものか、と答える。これは二人の間の交歓であり、公開するようなものではないだろう。公開すれば、天智に二重の苦痛（妻の背信、それが公衆に知れわたり笑いものになること）を与えることになる。天智はその恥辱に地団太ふむだろう。

それがどれほど危険なことか、次に述べるような、中大兄の邪魔者排除の謀殺を、長年にわたり見てきた熟年の二人にはよくわかつていたに違いない（注4）。

645年、中大兄皇子（天智）は、舒明天皇（皇極女帝の夫）の皇子であり中大兄の異母キョウダイ（兄）

にあたる古人大兄皇子を謀殺している。皇極退位のあと、古人大兄は次の皇位につくことを勧められたが、それを断り、出家して吉野に引退した。代わりに軽皇子（皇極の弟）が皇位についた（孝德天皇）。3か月後、吉備笠垂なる者が「古人大兄が謀反を企んでいる」と密告し、中大兄が攻め殺した。

658年、今度は、中大兄皇子は、孝德天皇（皇極女帝の弟）の皇子である有間皇子を謀略により謀反の罪に陥れて捕らえ絞首刑にしている。有間皇子は中大兄のいとこであり、皇位継承の有力候補であつた。斉明（＝皇極）女帝が紀伊白浜温泉に保養に出かけている時に、蘇我赤兄（後に左大臣に出世）が有間皇子に謀反をそそのかし、蘇我赤兄は、そのまま中大兄に密告した。（注5）。

しかも、蒲生野の縦獵が行われたのは、天智の後の皇位継承（それは3年後に迫っていた）をめぐる緊張が高まりつつあつた時期だつた。大海人は、中臣鎌足とともに長らく中大兄＝天智政権の中枢にいて、その後継者にふさわしい政治的経験と力量は天智をはじめ、群臣の認めるところだつたろう。しかし、天智は、成長しつつあるわが子、大友皇子（当時21歳）を後継に望むようになった。そうすると、大海人が邪魔になる。なんとか彼を排除する口実あるいは契機を考えていた時期だろう。そんな情勢を大海人が知らないわけではない。

実際に何が起きたか。

671年、重い病に伏した天智は病床に大海人を呼び、皇位を後継するよう頼んだ（古人大兄の場合とそっくり）。こつそりと大海人に天智の謀（はかりごと）を警告する者もいて、天智の謀略を知る大海人は皇位継承を固く断り、即刻剃髪し出家、早々に今や危険となつた近江を逃れ妻子と従者とともに吉野に引いた（注6）。

天智崩御の後、近江朝では吉野討伐の準備をしている、との知らせがあり、大海人皇子は飛鳥を出て兵を整え、武力で近江朝廷と対決、大友皇子の勢力を撃破、大友皇子（24歳）は近江で自殺した（672年、壬申の乱）。

近江の陣営では、指揮の混乱、用兵の遅滞、軍の内

証、寝返り、などあり、それが敗因となった。天智の負の遺産、すなわち、朝鮮出兵の失敗（注7）、強引な近江宮遷都（注8）、あくどい謀殺、大友後継の無理押し（注9）、などが群臣豪族の求心力を削いでいたのだろう。

673年、大海人は飛鳥浄御原にて即位して天武天皇となった。以後、重臣を置かず、天皇親政を行う。しかし、天智とちがつて、注意深く世論を見ながら政事を行った。特に、皇位継承にからんだ謀殺や血なまぐさい争いの悲劇を避けようとした。

679年、天武は6人の皇子を吉野に伴い、お互いに決して継承争いを起こさぬように、一人ひとりを抱きしめて誓いをたてさせた（吉野盟約）。

しかし、686年、天武が崩御するやいなや、天武の妻であるウノノサハラ（後の持統女帝）は、息子の草壁皇子（25歳）を立てるために大津皇子（24歳）を謀殺した（注10）。彼女は天智の娘であり、天智のやり方を踏襲したのである。草壁と大津は才媛の石川郎女を争っていた。天智・天武・額田王の関係とそっくり。

追記

そもそも、蒲生野の縦獵の夜、宴が催されたのだろうか。蒲生野（今の近江八幡あたり）は近江大津宮から約40キロの距離にある。日本書紀には文武百官ごとごとく参加とあるから、一行は百名を超していただろう。女性を伴つての移動であり、往路復路にそれぞれ途中一泊が必要だったろう。蒲生野で宴会があったとすれば、その食料飲料の運搬や調理も必要となる。なかなかの大イベントである。

日本書紀はこのころの天智の事績を細かに記す。宴会についても、

668年1月7日、群臣を召して内裏で饗応した。

同年7月、蝦夷を饗応した。

同じく7月、舍人らに命じてさまざまな場所で宴をした。

といちいち記録している。しかし、同年5月5日の縦獵の折に饗応があった、とは記されていない。もし、盛大な宴会が開かれたならば、その記述があつていいのではないか。

669年5月5日には、大津のすぐ近くの山科に皇

族群臣をつれて縦獵をしている。このときについても宴会の記録はない。それで、5月5日の行事にはたとえ宴会があつても記録しないのか、と思うかもしれないが、

671年の5月5日には、天智は西の小殿に出て、田舞をご覧になり、皇太子や群臣と宴を持ったとある。

結局、668年5月5日の縦獵の時にも宴会があれば記録されるはずだ、と考えられる。

その日、宴はなかった、という可能性が大きい。

付け加えて言えば、蒲生野の縦獵は単なる遊興のピクニックではないだろう。というのは日本書紀には

669年、男女700人を蒲生野に移住させた

670年2月、天智は蒲生郡の日野に出向き、宮を造営すべき地をご覧になった

という記事があるからである。天智は蒲生に別宮建設あるいは近江宮からの遷宮を企画していた。すると、668年の縦獵も、群臣たちに新宮建設の候補地を紹介し下見をさせる政治的な意図があつたのではないか。

終わりに

この稿は、私の書棚にある以下の本を参考にした。岩波書店「日本古典文学大系 万葉集一、二」、岩波新書「万葉秀歌 上巻」斉藤茂吉、講談社「私の万葉集一」大岡信、ちくま新書「女帝の古代王権史」義江明子、東大出版会「万葉私記一、二」西郷信綱。「日本書紀」はネット検索で参照した。

万葉集の研究の歴史は古く、二人の贈答歌についても、今までに非常に多くの評釈がある。すべてを参照したわけではないが、その多くは、文化的、文学的解釈あるいは想像であるようだ。私は、できるかぎり科学的に、つまり、その時代に生起した諸事象を列挙し、その中で人々がどう行動したか、を考えたい。

注1 妻といっても天智には9人、天武には10人のキサキ（皇后、妃、嬪）がいたという。ただし、このころは夫婦別居の妻問婚で、男が複数の女性のものと通うこともあれば、女も複数の男を通わせることもできた。「女帝の古代王権史」（義江明子）

注2 「私の万葉集一」 講談社現代新書 1992年、
講談社文芸文庫 2013年 47-48頁

注3 額田王は、実は、中大兄も愛していたのであり、大海人が恋の勝利者とは言えない、のかもしれない。額田王が中大兄を思つて作つた歌、というのがあるからである。

君待つと 我が恋居れば 我が宿の

すだれ動かし 秋の風吹く

ただこの歌は額田王の真作かどうか、疑いがある、と大岡信さんは言う。その根拠として、万葉初期の歌にしてはあまりに優美繊細であること、すだれ、秋風、といった万葉後期から平安朝にかけて盛んに詠まれる小道具が早くもつかわれていること、をあげる。私も、柄が大きくて積極的な額田王の作風とずいぶん違っていると感じる。

さらに、中国の「清商曲辞・呉声歌」という詩集に酷似した内容の詩があり、この歌はその影響で詠まれた可能性が指摘されているという（日本古典文学全集 小学館）。私が調べてみると、この詩集に想を得て李白は有名な「長安一片の月……」を作った。李白（701-762年）は額田王（690年ころ没）よりも半世紀あとの人である。もし、李白の作品とともにこの詩集が大和にもたらされたとしたら、額田王にはこの詩集を見るチャンスはなかった。

万葉集は750年ころ、李白をはじめ大陸の文化に傾倒していた大伴一族が編集した。大岡信さんは、彼女のこの歌が大伴一族の歌を多く収録する万葉集巻四にまぎれこんだように挿入されていることも考え、大伴一族の誰かが創作したのかもしれない、と想像する。

注4 もともと、中大兄皇子は、果断といえは聞こえはいいが、武力を持つて事を決する君主だったのではないか（古代文学研究者の西郷信綱さんは「彼は智謀にとんだ残忍な実行家」と言う）。治世中にほとんど武力行使の無かつた天武天皇と対照的である。

645年、中大兄皇子は中臣鎌足、石川麻呂らと謀つて、母である皇極女帝の目の前でみずからも長槍をふるつて蘇我入鹿を殺し蘇我本家を滅ぼした。

（乙巳の変）

649年、中大兄皇子は、今度は乙巳の変の同志である石川麻呂を謀反の誣告により殺害した。

658年、阿倍比羅夫に兵を与え、東北部の蝦夷を攻めさせた。

663年、大和朝廷は朝鮮半島に大軍を出兵した。この頃、遣唐使がたびたび（653年、654年、659年）派遣されて平和的な交流があり、唐と事を構えるかどうか、和戦をめぐる大和朝廷の中でも議論があつたと考えられる。その時、出兵を決断し、高齢の斉明女帝（筑紫に着くと間もなく崩御）や若い大海人皇子を引き連れて筑紫に宮を移して、全軍の指揮をとつたのは中大兄だつた。しかし、倭軍は唐・新羅連合軍に白村江で大敗した。敗北の後、中大兄は唐と信義を回復する方針に転換し、669年にまた遣唐使を送っている。

注5 中大兄の取り調べに、有間皇子は「天與赤兄知。吾全不知」（天と赤兄が知っている。私は何も知らぬ）と答えたという。「天」とは中大兄のことだろうか。享年19歳。紀伊の刑場に引き立てられていくときに、うたつた辞世の歌が残る。

磐代いわしろの浜松が枝を 引き結び

ま幸くあらば また還り見む

注6 大海皇子が12月の冷たい雨雪の降る中、妻子とわずかな従者とともに吉野に下るときの歌

み吉野の みみがの嶺に 時なくぞ 雪は降りける
間なくぞ 雨は降りける その雪の 時なきが
ごと その雨の 間なきがごと くまもおちず 思
いつぞ来し その山道を

蓑をつけて、雨と雪に打たれて、くねる山道を、馬は重く歩く、その一步一步ごとに、自分たちの運命を、今後の政治軍事を、考え、考えていた、という情景だろう。

注7 中臣鎌足は、天智崩御の2年前に病没しているが、死に臨んで、生きては軍国のためにお役に立てなかつた（朝鮮出兵の失敗のこと）、と詫びている。天智には反省なく、逆に、唐新羅の侵入を恐れて瀬戸内沿岸などに多くの砦を築き、労役にかりだされた人たちから怨嗟の声があがっている。

注8 近江遷都を風刺する歌謡が巷に流行したといふ。また、不審火が頻発した。近江宮の建物も天智が病臥している時期に不明火で消失している。

「額田王の近江に下るときに作る歌」

うまざけ 三輪のやま あおによし 奈良の山の

山のまに い隠るまで 道のくま い積るまでに

つづらにも 見つつ行かむを しばしばも

見さけむ山を 心なく 雲の 隠そうべしや

にも、奈良を離れて近江に行きたくない宮廷人の思いが読み取れる。

注9 当時、帝（みかど）が没すると、群臣が集まり次の帝を選んだ。その際に、まずは、亡くなった帝の同世代のキサキ（皇后、妃、嬪）、キョウダイ（兄弟姉妹）が候補となり、その中から、政事の経験を積んだ壮年の者が選ばれた（即位の時の推定年令は、推古 39才、舒明 36才、皇極 49才、孝徳 49才、斉明 61才、天智 41才、天武 42才、持統 45才）。

大海人という格好の適任者がいるのにもかかわらず、我が子可愛さの私情により、慣例無視（＝群臣無視）の独断で、政事の経験がほとんど皆無の大友皇子（24才）を帝位につけようとした天智の強引さは、群臣の間に深刻な分裂を生んだに違いない。

注10 大津皇子は文武に優れ群臣の支持は厚かったという。彼は謀反発覚から逮捕のわずかの間に、ひそかに、伊勢神宮に下り、幼い時から一緒に育った親しい姉（大伯皇女、斎宮）を訪ねた。語り明かした次の朝、運命の待つ大和に帰る弟を見送って万感迫つていつまでも立ちつくす姉の歌。

わが背子を 大和に遣ると さ夜ふけて

あかとき露に 我が立ち濡れし

大津皇子の辞世の歌

ももづたう 盤余の池に 鳴く鴨の

今日のみ見てや 雲隠りなむ

なお、この歌は、後の人が皇子を悼んで作ったという説があるが、私は、この歌はとても平明で、皇子の文才をすれば処刑前のわずかな時間でも作れると思う。